

# 冬期ダゾメット処理のネギアザミウマ及び ネギえそ条斑病に対する防除効果

○上田由里子<sup>1</sup>・徳丸 晋<sup>2</sup>・浦野桂子<sup>3</sup>・静川幸明<sup>3</sup>・平野真太郎<sup>4</sup>

<sup>1</sup>J A 京都中央・<sup>2</sup>京都府農林水産技術センター・<sup>3</sup>京都府京都乙訓農業改良普及センター・  
<sup>4</sup>クミアイ化学工業(株)

## はじめに

京都府では、京野菜をはじめとする、九条ねぎやキャベツ等の栽培が盛んである。しかし、近年、アザミウマ類の被害が増加しており、特にネギアザミウマによる被害は深刻化している。また平成26年には、ネギアザミウマが媒介するネギえそ条斑病(IYSV)の発生が当JA管内で初めて確認された。京都府においてネギアザミウマの防除は薬剤散布が中心となるが、本種の殺虫剤に対する感受性低下も懸念される中、早急な防除対策が求められている。そこで、ネギハモグリバエで一定の効果が確認されている(神川・井村, 2014)、ダゾメット剤に着目し、冬期処理をおこなうことで、土中で蛹化するネギアザミウマに対する防除効果について調べた。

## 材料および方法

試験は、京都府京都市伏見区のネギ栽培圃場においておこなった。2014年1月16日にダゾメット剤30kg/10aを散布し、被覆区、無被覆区、対照区を設定した。被覆区および対照区は2014年4月8日、無被覆区は同年4月25日にそれぞれ定植した。調査は、4月10日から6月11日までおこない、各処理区でネギをランダムに25株選択し、ネギアザミウマによる被害が認められた場合には被害程度について調べた。被害程度は、5段階(A:1株の被害葉率が100~51%以上、B:同50~31%以上、C:同30~11%以上、D:同10~1%以上、E:同0%)に区分し、被害度を求めた。また、各処理区に黄色粘着板(商品名:ホリバー)をそれぞれ2枚設置し、約1週間間隔で誘殺虫について調べた。さらに、5月下旬からはIYSVの発生の有無についても調べた。

## 結果および考察

ネギアザミウマによる被害痕は、全ての処理区で調査開始日から確認したが、被覆区での被害度は、5月上旬まで対照区の約2分の1に推移した。5月中旬に被覆区の被害度は、対照区と同等になったが、5月下旬から収穫期(6月中旬)まで再び対照区の約2分の1に推移した。無被覆区の被害度は、試験期間を通じて被覆区および対照区より高い値に推移した。これは、定植時の苗に本種が発生していたものと考えられる。黄色粘着板への誘殺数は、被覆区および無被覆区では5月中旬まで対照区の約2分の1の値に推移したが、5月下旬から6月中旬まではほぼ同等となった。えそ条斑病の発病葉率は、被覆区および無被覆区で対照区の約3分の1および2分の1に抑えた。

以上の結果から、ダゾメット剤処理により、ネギアザミウマの初期発生に対しては有効であるが、栽培後期では効果が落ちると考えられた。これは、ネギアザミウマの圃場外からの飛び込みの影響によると考えられる。

Control of *Thrips tabaci* (Lindeman) and *Iris yellow spot virus* on Welsh onion using dazomet application in winter.

Yuriko Ueda<sup>1</sup>・Susumu Tokumaru<sup>2</sup>・Keiko Urano<sup>3</sup>・Yukiaki Shizukawa<sup>3</sup>・Shintaro Hirano<sup>4</sup>

<sup>1</sup>JA Kyoto Chuo

<sup>2</sup>Kyoto Prefectural Agriculture, Forestry and Fisheries Technology Center

<sup>3</sup>Kyoto Prefectural Kyoto Otokuni Agriculture Improvement Extension Center

<sup>4</sup>Kumiai Chemical Industry Co., Ltd.